令和 3 年度　西南戦争歴史講座　特集－西南戦争の好漢たち－
村田新八の西南戦争　～田原坂周辺の戦いを中心に～

2021 年 10 月 9 日（土）

明治維新史学会 卯月かいな

1．村田新八について

①プロフィール

慶応元年（1865）9 月、長崎で撮影か

明治 5～6 年（1872～73）頃、パリにて

・天保 7 年 11 月 3 日（1836 年 12 月 10 日）生まれ。明治 10 年（1878）9 月 24 日鹿児島・岩崎谷にて戦死。

→同じ天保 7 年生まれとしては、山岡鉄舟、榎本武揚などがいる。西郷隆盛（文政 10 年/1828 年生まれ）とは 9 歳差、大久保利通（文政 13 年/1830 年生まれ）とは 7 歳差（当時は数え年）

・薩摩藩士・高橋八郎の三男。諱（いみな）ははじめ良満、のち経麿、経満。23 歳頃に村田十蔵の長女と結婚後、26 歳で十蔵と養子縁組し村田新八となる。

・身長六尺（約 180 ㎝）、眼光炯炯人を射る、挙止深沈などと評される。【史料 1】

・美術や音楽を好み、岩倉使節団の一員として洋行後、手風琴（アコーディオン・コンサティーナの類）を持ち帰り、たしなんだとされる。【史料 2】

→幕末にすでに薩摩藩は西洋式の軍楽隊を持っていたが、日本で西洋音楽が一般に広まるのはまだ先の話。個人で西洋の楽器を手に入れて弾いていたのが事実であれば、かなり時代を先取りしていたことになる。

②西南戦争に至るまでの経歴

・安政 6 年(1859)6 月頃　西郷隆盛、大久保利通などが参加していた精忠組に加盟。

・文久 2 年(1862)6 月　藩命により西郷と共に上洛する際、藩主の父・島津久光の命に背いた罪で喜界島に遠島(西郷は徳之島、のち沖永良部島に遠島)

→遠島から復帰した時の役職は、京都留守居付役(留守居＝外交官的存在)。それもあり、長州などへの使者になることが多かった。また戊辰以降藩主・島津忠義の供をする機会も何度かあり、立派な体格と落ち着いた性格が買われたか。

・元治元(1864)年 7 月　禁門の変。御所の乾門の警備や長州藩の本陣だった天龍寺へ隊長として派遣される。

・慶応 2 年(1866)1 月 21 日　薩長同盟成立。以後、長州への使者を務め薩長間を往来。

・慶応 3 年(1867)12 月 11 日(王政復古政変の 2 日後)　会津藩士と斬りあいになり負傷。

・慶応 4 年(1868)1 月 3 日　戊辰戦争始まる。新八は西郷に従っていたり、鹿児島へ援軍を求める使者になったりと、あまり最前線に立つことはなかった模様(負傷の影響か？)

・明治 2 年(1869)4～7 月頃　藩命により京都・東京に出張(藩の兵器奉行だったと思われる)

・明治 2 年 9～12 月　藩兵を率いて東上する忠義の供で、東京に出張(親衛隊長的な立場)

・明治 3 年 12 月　東京詰めを命じられ、これ以後東京に滞在か。

・明治 4 年(1871)8 月 1 日、明治政府の宮内大丞(従五位、四等官)となる。

・9 月 27 日　岩倉使節団派遣内定。新八、洋行の希望を申し入れたことを家族に手紙で知らせる

・11 月 12 日　岩倉使節団、横浜を出発。新八の肩書きは理事官随行(宮内省派遣の理事官は侍従長・東久世通禧)

・12 月 6 日(1872 年 1 月 15 日)　使節団サンフランシスコ着。

・3 月末～4 月頭(以後新暦)　新八ら宮内省派遣メンバー、アメリカを離れ渡欧。新八は以後主にパリに滞在か。

・10 月 26 日　宮内大丞を辞職し、私費留学に切り替えたいという意向を上司の東久世に伝える。

→他の使節団員が続々と滞在延期を申し出る中、この時点で辞職してまで私費留学に切り替えたのは、確認できた限りでは新八のみ。

・明治 6(1873)年 1 月 12 日　宮内大丞免官の辞令が出る。

・11 月 23 日　大山巌がいたスイスやイタリアを経由後、マルセイユから日本へ向けて出航か。

・明治 6 年 12 月末～明治 7(1874)年 1 月上旬頃　日本に到着

・1 月 21 日　横浜から大阪方面の便船に乗り、帰郷。

→大久保利通が新八の帰郷を知り嘆いたなどと言われるが、史料上は確認できない。むしろ、政府側の洋行経験者には新八の帰郷はよい影響を与えると歓迎されていた模様。

・明治 7 年(1874)6 月　私学校設立。新八、砲隊学校の監督になる。

・明治 10 年(1877)1 月 10 日頃　鹿児島を訪れた池辺吉十郎、佐々友房(のち二人とも熊本隊として薩軍に参加)などと会談。

→この時、新八は西郷を首相にするのが自分の役目だと語ったという。鹿児島県士族の挙兵につ

いて探りたかった池辺は、「対話数刻、ついにその要領を得ず」との感想を残す【史料 3】

2. 西南戦争中の村田新八の動き

①薩軍出兵

・明治 10 年(1877)1 月 29 日　私学校党数十人が鹿児島・草牟田の陸軍火薬庫を襲う。

・2 月 5 日頃　西郷も含めた私学校幹部会議で出兵決定。新八は沈黙していたという。

→挙兵の直接的原因は火薬庫等の襲撃と西郷隆盛暗殺計画疑惑にあるが、暗殺計画はねつ造の可能性が高い。政府側が以前から密偵を送りこみ鹿児島の動静を注視していたのは確かだが、挑発したというわけではない。

・2 月 17 日　二番大隊長として西郷等と共に鹿児島を発つ(人吉経由)

・2 月 27 日　高瀬の戦い。夜、本営会議。

→この時、部下が南関の政府軍本営を攻撃し、その後軍を二手に分けて佐賀・長崎を攻撃するという作戦を進言。新八は、まだ熊本城を攻撃中であること、西郷がいる本営から遠く離れ補給が困難になることなどを理由に、遠くへ行かず険しい地形を生かして戦うのがいいとした。これにより、田原坂～吉次峠～三ノ岳の要所を押さえて布陣するという方針が決まった。【史料 4】

②木留・吉次方面の戦闘

・2 月 28 日頃　薩軍・熊本隊の出張本営を木留に設ける。のち、病院も設置。

・3 月 1 日　木留本営において、3 個小隊に田原坂に赴き哨兵に就くよう指示。

・3 月 3 日　木留本営から、篠原国幹、別府晋介とともに吉次峠の救援に赴く。葛山の頂上の凹部に小屋を作り、篠原と新八はそこで指揮を執ったという【史料 5】

・3 月 4 日　引き続き吉次峠で指揮を執る。この日、篠原戦死。

→この時に元部下だった江田国通少佐が篠原を狙撃させたという話があるが、政府軍は拾得した薩軍兵士(岩川郷士)の日記で後日戦死を知っている。狙撃したという話は新聞の創作だと思われる【史料 6】

・3 月 12 日　吉次峠において木葉進撃の 3 個小隊を指揮するも、目的を果たせず。

・3 月 15 日　横平山の戦い。新八は耳取にて指揮を執ったという。

・3 月 20 日　田原坂方面陥落。木留本営が騒然とする中新八は寝ており、その後いつもと変わらず冷静に指示したという【史料 7】

→田原坂方面陥落後も木留方面はよく持ちこたえていた【史料 8】

・4 月 5 日　西郷の命により木留本営から熊本本営に移動。

③人吉～延岡　転戦の日々

・4 月 13 日　夜、熊本本営移転。西郷などと共に木山へ移動。

・4 月 22 日　西郷などと共に人吉へ向かう(編制替えで新八は本営付となる)

・4 月 26 日　人吉着。本営を永国寺に置く。西郷は新宮家を宿舎とする。

→薩軍は人吉を本拠地として割拠の方針を取る。西郷が新八らと夕方連れ立って散歩に来ていたという話や、新八が屋敷を提供した人吉隊の新宮嘉善に、焼酎が届いたから一緒に飲みたいので帰ってきてくれませんか、と誘う手紙が残る(『人吉市史』第 2 巻上 P316)

・6 月 1 日　人吉陥落

これ以降、新八は鹿児島・宮崎の各地を転戦。6 月 11 日～7 月 14 日の約一ヶ月間で分かっているだけでも、大畑(おこば)→加久藤→福山→加治木→国分→福山→末吉→志布志→通山(現・曽於市)とめまぐるしく動いている。都城方面の上級指揮官として、各地を移動して作戦指導していたと考えられる。

・7 月 24 日　都城陥落。

・7 月 29 日　西郷、高鍋に移動。この頃新八は宮崎におり、残留して宮崎方面の薩軍を指揮。

・7 月 31 日　薩軍、宮崎より退却。政府軍が攻めてきた時には新八は入浴中だったが、あわてずに入浴を続けたという【史料 9】

・8 月 3 日　桐野利秋と共に美々津の薩軍を指揮(美々津方面は 8 日に陥落)

・8 月 15 日　延岡・和田越にて西郷が陣頭に立つも延岡奪還ならず。薩軍最後の組織的戦闘。

④薩軍解散～西南戦争終結

・8 月 16 日　西郷、軍に解散命令を出す。

・8 月 18 日　薩軍、可愛岳突破。

・9 月 1 日　三田井、小林などを経由して鹿児島に帰還。以後 400 名弱で城山に立て籠もる。

・9 月 22 日　河野主一郎ら、西郷の助命嘆願のため政府軍の川村純義に面会。山縣有朋からの手紙を読んだ西郷は、回答の必要なしとする。

・9 月 24 日　午前四時、政府軍の総攻撃開始。新八、岩崎谷の堡塁で戦死。

→切腹したともされるが、詳細不明。胸を撃たれていたことは確からしい。

3. 従軍した村田新八の息子達

①長男・村田岩熊について

新八と岩熊。明治 4 年 11 月頃撮影か

・安政 6 年(1859)8 月 3 日生まれ。明治 10 年 3 月 28 日、植木にて戦死。享年 19。

・明治初年には村田家代々の通称である十蔵を名乗っていた模様。諱は経義。戦死者名簿には村田岩と記録される。

・「天資俊敏にして才幹あり」「将来の偉器を以て称せらる」とされ、生まれつき頭がよく将来を期待されていたという。

・明治 5 年 2 月、開拓使留学生として西郷菊次郎(西郷の庶長子、のち京都市長などを務める)らと共にアメリカへ留学。

・明治 7 年 2 月 6 日　帰国、父・新八と前後して鹿児島へ帰郷か

■岩熊の西南戦争における戦歴

・四番大隊（大隊長・桐野利秋）七番小隊所属。明治 10 年 2 月 16 日鹿児島発、21 日熊本着。
・2 月 23 日、植木口出張を命じられ、木葉・山鹿方面へ転戦。
・3 月 4 日　田原坂へ派遣される。田原村・休（よこい。現・田原坂公園周辺）を守っていた模様。
→所属隊では岩熊が若いため、当初伝令として使っていたらしい。伝令として木留本営に行った岩熊を、新八が陣頭で奮闘せよと叱ったという【史料 10】
・3 月 28 日　植木で戦死
→『西南記伝』では戦死日時を 4 月 1 日とし、長年それが信じられてきたが、「薩賊死亡姓名」（川尻・延寿寺の埋葬記録を熊本県が筆写したもの）などの記録から、3 月 28 日が正しい戦死日と考えられる【史料 11】

■民謡「田原坂」のモデルは岩熊か？

〽雨は降る降る　人馬は濡れる
　越すに越されぬ田原坂

　右手（めて）に血刀　左手（ゆんで）に手綱
　馬上ゆたかな美少年

・民謡「田原坂」の起こり
熊本隊の一員だった岡本源次が戦後済々黌の教師となり、生徒を連れて田原坂に遠足した時に「雨は降る降る　人馬は濡れる　ここが古戦場の田原坂」と歌ったのが元だという説がある（『植木町史』コラム「民謡・田原坂」より）

・「馬上ゆたかな美少年」のモデルとされる人物
・村田岩熊
・東野孝之丞→都城出身。15 歳で西南戦争に従軍、戦死。荻迫柿木台場跡に墓がある。
・三宅伝八郎→人吉隊士。伝令として活躍したという。
・高橋長次→熊本隊隊士。負傷しながらも刀を敵中に残したことを恥じて取りに戻ろうとした。病院に運ばれる途中で死亡。享年 26（古閑俊雄は 16 とする）【史料 12】

このように「美少年」のモデルとされる人物は複数おり、十代で従軍した少年兵も多かった。『西南記伝』には「少年将士伝」として、こうした少年兵達の小伝がある。

②次男・村田二蔵（基太村経義）について

・万延二年（1861）1 月 6 日生まれ。大正 14 年（1925）1 月 11 日没。

・通称は釜次郎、二蔵。『西南記伝』では諱は経明、のち経義とする（が、多少疑問がある）

・西南戦争後、国事犯として懲役 1 年を求刑される。宮城県監獄署に収監され、明治 12 年（1879）5 月に釈放される。

・釈放後、明治 12 年 9 月に基太村八郎の養子となる（村田家は三男の経正が継ぐ）

・警視庁に奉職、晩年は水戸の郡長に推薦されたが、部下の不始末の責任を取って郡長とはならず、鹿児島に帰る。

■二蔵の西南戦争における戦歴【史料 13】

・三番大隊（大隊長・永山弥一郎）三番小隊所属。2 月 16 日鹿児島発、川内、出水を経由する西回りで熊本へ。

・熊本城下を二十日ほど守備した後、植木口（植木南部、向坂を中心とする地域）へ派遣される。

・その後、荻迫、櫻原（桜井、現・熊本市北区植木町）の守備につく。この地で部隊改編があり、三番大隊三番中隊となる。同時に二蔵も押伍（下士官）になったと考えられる。

→荻迫地区は非常な激戦地。4 月 8 日の戦闘では政府軍の死傷者 288 名、費消弾薬数は 54 万 9200 発とされる。

・その後人吉へ移動、途中さらに部隊改編があり正義二番中隊所属に変更。

・深川（水俣）で滞陣中（5 月上旬頃）に分隊長に。薩軍が追いつめられるにつれ、二蔵の隊も水俣から東へ東へと移動し、延岡の北・長井村へ至る。

・二蔵は負傷していたため可愛岳突破には参加できず、政府軍に降伏。 その前に新八に形見の品を渡されたという【史料 14】

4. おわりに

・村田新八は薩軍幹部の中で唯一の洋行経験者。また洋行前は宮内大丞で、他の薩軍幹部が軍人だった中、一人だけ文官だったという点でも異彩を放つ。

・挙兵直前に池辺などに語った言葉や幹部会議における態度などから、新八が挙兵に賛成していたとは思われない。西郷を助けて鹿児島県士族を抑えておきたかったが、政府に不満を持つ士族達の勢いを止められなかったか。

・いざ戦争が始まると二番大隊長として戦闘を指揮し、田原坂が戦いの中心となるきっかけを献策。後半は都城を中心に各地を戦闘指揮のために飛び回るなど、かなり活発に動いている。個人的な心情はどうあれ、戊辰戦争であまり活躍できなかったこともあり、武士としては存分に戦えて本望だったのではないか。

※レジュメ本編の写真はすべて、桐野作人・則村一・卯月かいな『村田新八』（洋泉社、2018 年）掲載の写真（村田新八遺品保存会蔵、黎明館寄託）を転載。